＜2022年度　第2回定例研究会／ハイブリッド開催＞

過疎地の里山保育
―保育・子育ての原風景がここにあります―

講演：
坂本　顕真（あさひ森の保育園 園長）
コメンテーター：
宮里　六郎（熊本学園大学 名誉教授）

日　時：2022年9月10日（土）18時～19時30分

はじめに

2022年第2回定例研究会は、本研究所の地域貢献事業の一環として、「過疎地の里山保育－保育・子育ての原風景がここにあります－」のタイトルのもと開催した。あさひ森の保育園（八代市坂本町鶴喰）園長の坂本顕真氏にご講演いただいた後、本学名誉教授の宮里六郎氏にコメントをいただいた。

少子化が進む現在、都心部の保育所においても定員割れが生じ始めている。過疎地域の保育所に至っては、存続の危機に直面する状況もある。国は「過疎地域の切り捨て」とも捉えられる保育所の統廃合などの検討を始めている。この現状の中でも坂本町鶴喰（つるばみ）地区にあるあさひ森の保育園は、自然だけでなく、里山の鶴喰を守ってきた人達の暮らし・気持ちと触れ合いつつ、園に集う子どもたち、保護者、職員の「誰もが幸せになれる保育」と「里山保育を軸とした地域の活性化」を目指している保育所である。過疎地の里山保育の魅力を発信し、過疎地の保育の必要性を考える機会とすべく、本研究会が開催された。以下、その概要を報告する。

１．あさひ森の保育園の概要

「あさひ森の保育園」は、2020年 熊本豪雨に見舞われた球磨川の支流に広がる中山間地の集落（八代市坂本町鶴喰）にある、定員50名の認可保育所である。1954年に農繁期託児所として開設され、2020年の園舎移築・新築を機に、これまでの「あさひ保育園」という名称から現在の「あさひ森の保育園」と名称が変更された。園の特徴として里山に溶け込んだ保育の実施、日常的に里山の人たちとの世代間交流が盛んであること、地域の自主避難所にもなっていること、などが挙げられる。

2022年9月現在、園児数は49名である。49名のうち、47名は八代市内から通園バスを利用して通園している。そのため、保護者と保育士が直接顔を合わせる機会が少なく、全園児への毎日の連絡帳やクラスだより・給食だより、ホームページやSNSを通して子どもたちの様子を細かく伝えている。

2．子どもといっしょにつくる保育

2021年度の年長クラスの取り組みの一つである、森の中での運動会について紹介があった。園の運動会は、例年、担任が子どもたちに描く最終目標があり、そこに向かって取り組むという形で、組体操や跳び箱、竹馬、リレーなどの種目が行われていた。しかし、子どもたちからの、「自分たちが楽しい運動会にしたい」「鬼ごっことかドッジボールとかしたい」「先生たちじゃなくて自分たちで決めたい」「先生たちの言う通りにするのは面白くない」という声があり、子どもたちと保育士が話し合いを行った結果、運動会の内容も場所も、子どもたち自身が考えて作る運動会の開催となった。

場所は、「がくゆうの森」で、名前も運動会ではなく「みんなあつまれひみつのだいぼうけん」となった。子どもたちが普段過ごしている森に保護者を招待し、保護者も参加、親子で勝負する。プログラムは、① 森の中の水場の穴に石を投げ入れる「ぼっちゃん」、② 山の斜面を利用した「やまのぼりかけっこ」、③ 森で見つけた松ぼっくりや椿の実を投げる「きのみいれげーむ」、④ 子どもたちが普段楽しむけいどろとドッジボールを組み合わせた「けいどろドッジ」、⑤ 子どもたち一人ひとりが目標を決めた高さまで登る「きのぼり」、となった。子どもたちが遊びながら自分たちで考えた運動会である。

保育所や幼稚園等の就学前保育施設における保育計画は、保育士が「計画→実践→検証→修正」のサイクルを作り、子どもたちに指導する課題提示型が一般的である。しかし、あさひ森の保育園では、子どもたちが遊びながら保育士といっしょに「計画→実践→検証」をする、子どもといっしょにつくる保育が実施されている。

3．地域の方と共につくる里山保育

里山保育とは「自然保育」、「森の幼稚園」とも異なる。「里山」とは、自然だけでなくそこで暮らす集落・人も含んだ言葉で、散歩中心の「里の保育」と自然探検中心の「山の保育」をあわせて「里山の暮らし」に溶け込んだ保育を「里山保育」と呼んでいる。園に子どもたちを囲い込むのではなく、園の外（里山）に出る。散歩をすれば、おじいちゃんやおばあちゃんが声を掛けてくださり、子どもたちも地域の方も笑顔の交流が広がる。すると、地域の方から「どこに行くとかい。マムシがあそこにでたけん注意せんばんよ」「きゅうり、なすびとりにきていいよ」と声をかけられる。子どもたちが遊ぶ川に、「これはね、川のお守りだよ。みんなが安全に遊べますようにと川の神様にお祈りしているんだよ」と竹でできたお守りを川辺の草に吊るしてくれている方もいる。

これらの時間は、園の子どもたちにとっても、地域のおじいちゃん、おばあちゃんにとっても価値ある時間になっている。過疎化で地域がさびれていく中で、子どもの泣き声、笑い声、戯れて遊ぶ声は、大人やお年寄りを、そして、地域を明るく元気にしている。子どもは親や保育者だけでなく、たくさんの大人に声をかけられ育つ。子どもに目を向け、言葉をかけ、心配してあげることが「地域の子育て力」といえる。子どもたちの散歩を通して世代間交流が自然と成り立っており、それは形式的な交流会ではなく、園の子どもたちと里山の人々との暮らしの中の「ご近所づきあい」の風景がある。

加えて、「食」と「農」がつながった「食農保育」も過疎地らしい保育といえる。散歩先で近所の

方から果樹や農作物をいただいたり、ときには、おばあちゃんに野菜づくりを教えてもらったり、手伝ってもらったりと収穫を目的にするよりも「食」や「農」を通して里の人との交流を育みながら「農的な暮らし」の傍らで子どもたちは過ごしている。

４．過疎地の里山保育の展望－坂本氏の思い－

今後の過疎地の里山保育の展望として、講師の坂本氏は、① 鶴喰活性化チームの立ち上げ（地域の方、地域から離れた方を交えたワーキングの場の開催）、② 農繁期の人手不足解消（保護者の方に声をかけ、手伝ってもらう）、③ 耕作放棄地の活用（耕作放棄地を法人で管理し、田植え、稲刈りなどの体験の実施）、④ 不登校児やその保護者の居場所としての交流、⑤ いきつけのお家での手料理交流、以上の５つの構想を検討している。

子どもは子ども、高齢者は高齢者と分けずに、さまざまな人が混ざり合い、力を合わせて助け合いながら生きる過疎地を目指している。現在、全国的にも世代間交流を意図した幼老複合施設が少しずつ増えているようだが、過疎地の保育園は、地域全体が、幼老複合施設の役割をすでに果たしている。乳幼児期から、ずっとずっと、頑張れ頑張れと言われ続けられ、結果や成果が出ないと、頑張らないあなたが悪い、努力しないあなたが悪いと言われ続けられ、それに応えていこうと子どもたちは頑張っている。その結果、「自分がないまま」生きてきて、心にぽっかり穴が開いた時、自分の存在の価値が見出せず、自殺する人や空っぽな心を埋めるために、幸せそうな人を見ると無差別に殺してしまうというような犯罪が後を絶たない。乳幼児期の子ども達には、ありったけの楽しさ、ありったけのしあわせを届けたいと願っている。

おわりに

本研究会には、会場参加とオンライン参加を合わせて約 90 名の参加があった。オンラインを活用し、県外からの参加者も複数名あった。研究会終了後のアンケートには、「同じ過疎地に（園が）立地しています」、「具体的な園から飛び出して"地域に出向く"という保育実践は、環境の違いがあったとしても（都市部の保育でも）実施していけるのではないかと思いました」、「人間が生きていてよかった、生まれてよかったと感じにくい世の中です。その世の中を変えていく力が里山保育にあると思いました」、「子どもと保育士は対等という考え方で、私も今後クラスの一員として、まずはもっと子どもに相談してみたり、投げ掛けてみよう、子どもに任せてみようと思いました」、等々、多くの感想が寄せられた。

また、本研究会の内容を再度見たい、園内の他の職員にも見せたいという要望が寄せられ、講師の坂本先生、コメンテーターの宮里先生の許可を受け、本学学術文化課課長の動画編集等々の尽力により、YouTube で配信するに至った。さらにこの動画配信をきっかけに、テレビくまもとが、2022 年 12 月に「全国から注目！八代市の里山保育」というタイトルで、あさひ森の保育園の様子をニュース番組の中で取り上げることにつながった。その週のニュースアクセスランキング１位にもなる程に注目された。

研究会参加者からは、園が今後どのように変化していくのかも知りたい、という継続報告の要望も

あった。里山とそこに集う子どもたちとの暮らしの姿に着目し、広く知らせていくことの必要性が感じられた研究会となった。

○本研究会の動画

https://www.youtube.com/watch?v=qHzAmqM5ZG8&list=LL&index=1&t=9s

※YouTube で「熊本学園大学社会福祉研究所」を検索すると表示されます。

○あさひ森の保育園　Instagram

https://www.instagram.com/asahi._mori/

※毎日の保育の様子を動画で観ることができます。

（研究会報告担当者：上原真幸）